

学位授与番号：甲 1109 号

氏 名：中野 優子

学位の種類：博士（医学）

学位授与日付：令和 1 年 6 月 26 日

学位論文名：

**Depression and anxiety in pet owners after a diagnosis of cancer in their pets :  
a cross-sectional study in Japan.**

（犬、猫が悪性腫瘍と診断された際の飼い主の抑うつ状態および不安：日本における横断研究）

学位論文審査委員長：教授 矢野真吾

学位論文審査委員：教授 岩楯公晴 教授 忽滑谷和孝

# 論文要旨

氏名	中野 優子	指導教授名	松島 雅人
<b>主論文</b> <b>Depression and anxiety in pet owners after a diagnosis of cancer in their pets : a cross-sectional study in Japan</b> (犬、猫が悪性腫瘍と診断された際の飼い主の抑うつ状態および不安：日本における横断研究) Yuko Nakano, Masato Matsushima, Azusa Nakamori, Junshiro Hiroma, Eiji Matsuo, Hidetaka Wakabayashi, Shuhei Yoshida, Hiroko Ichikawa, Makoto Kaneko, Rieko Mutai, Yoshifumi Sugiyama, Eriko Yoshida, Tetsuya Kobayashi BMJ Open. 2019Feb 19;9(2): e024512. doi: 10.1136/bmjopen-2018-024512.			
<b>要旨</b>			
<b>【背景】</b> 日本では少子高齢化や世帯構成人数の減少という社会構造の変化の中で、犬、猫は伴侶動物、すなわち家族の一員として扱われるようになってきた。近年、獣医療領域での診断技術の向上によって多くの犬、猫は悪性腫瘍によって死亡する。犬、猫が悪性腫瘍と診断され、告知を受けた飼い主の心理状態は不明であるが、人のがん患者の家族と同様に、飼い主は抑うつ状態や不安を経験しているというのが仮説である。			
<b>【目的】</b> ：犬、猫が悪性腫瘍と診断された際に飼い主に抑うつ状態や不安が存在するかどうか、また、抑うつ状態や不安が存在する場合はその予測因子を明らかにする。			
<b>【研究デザイン】</b> ：横断研究			
<b>【セッティング】</b> ：犬、猫の腫瘍専門二次診療施設（日本小動物がんセンター）と一次診療クリニック 2 施設（アステール動物病院、みなみ野動物病院）			
<b>【参加者】</b> ：犬、猫が悪性腫瘍であると告知され 1～3 週間経過した飼い主 99 名と健康な犬、猫の飼い主 94 名			
<b>【主要項目の測定】</b> 抑うつ状態は The Center of Epidemiologic Studies Depression Scale (CES-D 日本語版)、不安は State-Trait Anxiety Inventory-Form JYZ (新版 STAI) を用いた自記式質問票調査にて測定した。			
<b>【結果】</b> 悪性腫瘍動物の飼い主群の CES-D 得点は、交絡変数で調整しても、健康動物の飼い主群と比較して有意に高かった。悪性腫瘍動物の飼い主では、職のある飼い主の方がより強い抑うつ状態となりやすかった。同様に、悪性腫瘍動物の飼い主群の状態不安得点は、交絡変数で調整しても、健康動物の飼い主群と比較して有意に高かった。動物の予後が悪い場合と飼い主自身の特性不安が高い場合に不安が強かった。			
<b>【結論】</b> 犬、猫が悪性腫瘍と診断された際に一部の飼い主に抑うつ状態や不安が認められた。職のある飼い主の方がより強い抑うつ状態となり、動物の予後が悪い場合と飼い主自身の特性不安が高い場合に不安が強かった。家庭医は犬、猫を家族図に含め、犬、猫の健康状態も考慮すると診療に役立つ可能性がある。			

## 学位論文審査結果の要旨

中野優子氏の学位申請論文は、主論文1編よりなり、主論文のタイトルは、「Depression and anxiety in pet owners after diagnosis of cancer in their pets: a cross-sectional study in Japan (犬、猫が悪性腫瘍と診断された際の飼い主の抑うつ状態および不安)」と題するもので、2019年にBMJ Open誌に発表された。この研究は地域医療プライマリケア医学の松島雅人教授の指導によるものである。以下に論文審査委員会の結果を報告する。

本申請に対し岩楯公晴教授、忽滑谷和孝教授を審査委員とし、平成31年6月12日に公開審査会を開催した。

日本では少子高齢化や世帯構成人数の減少という社会構造の変化の中で、犬や猫などのペットは家族の一員として扱われるようになってきた。近年、獣医療の技術の向上によって動物は長寿化し、多くの犬や猫は悪性腫瘍によって死亡する。飼い主とペットの繋がりが強くなるゆえに、ペットが亡くなった時の飼い主の悲観反応が負の側面として報告されている。そこで、本研究は悪性腫瘍動物の飼い主群と健康動物の飼い主群の2群に対して自記式質問調査を行い、犬や猫が悪性腫瘍と診断された際に飼い主に抑うつ状態と不安が存在するかどうか、またその予測因子について検討した。公開審査会では中野氏の口頭発表後、質疑応答を行った。席上、1) 今回の調査は高度医療を担う病院で行われているが、特殊な集団を対象とすることによるバイアスがかかった可能性はないか、2) うつ病の既往や飼い主の personality について検討されているか、3) 動物の年齢によって飼い主の反応に違いを認める可能性はあるか、4) 子供がいる飼い主といない飼い主とで抑うつ反応に違いがあったか、5) 特性不安は不安になりやすい性格傾向を示すものだが、悪性腫瘍と診断された時の1回の調査で特性不安の評価は可能か、6) 悪性腫瘍患者に病名を告知した場合、告知してから約2週間で病気を受け入れ、通常反応に回復することが多いが、飼い主がペットの病気の告知を受けてから2週間前に調査を行った場合と2週間後に調査を行った場合でCES-Dの点数に差があったか、など多数の質問と指摘があった。しかし、中野氏はそれぞれに対してご本人の見解に文献的考察を加えて回答し、活発な議論が交わされた。悪性腫瘍動物の飼い主群は健康動物の飼い主群と比較して、交絡変数で調整してもCES-Dの点数および状態不安得点が高い傾向にあった。また職のある飼い主の方が職のない飼い主と比べ、強い抑うつ状態になることが明らかになった。本研究は、犬や猫が悪性腫瘍との告知を受けた飼い主の心理状態を調査した初めての報告である。これからの家庭医は犬や猫を家族図に含め、動物の健康状態も考慮することにより診療に役立つ可能性について言及した本研究は大変興味深く、また今後の発展が期待できる。この点を評価し、慎重審議の結果、学位論文として十分価値のあるものと認めた次第である。